

# Wesley Hall News

ウェスレー・ホール・ニュース

March, 2026 No.150



知恵ある心を私たちに  
与えてください。

詩編第90編12節

高等部卒業式

青山学院スクール・モットー

地の塩、世の光

The Salt of the Earth, The Light of the World

(マタイによる福音書 第5章 13-16 節より)

# 神ともに いまして

大学宗教主任 左近 豊



マタイによる福音書 第28章20節

私は世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。

## 卒業される皆さんへ

わたしが学生だった頃は、NetflixもAmazon Primeもありませんでした。よく池袋駅の場末の映画館に行きました。そこでしかやっていないような、ちょっと前に封切られたロードショー落ちの映画や、一時代前のヨーロッパの作品などを2本抱き合わせのセット料金で、しかも学生割引で、閑散とした客席で、スクリーンに映し出される切り取られた世界に浸り、漂っていました。

見たい作品とセットになっていたので成り行きで見ることになったのに、そちらの方が心に刺さったという作品も少なくありませんでした。報われることなくハッピーエンドで終わらず、理不尽さに沈んだまま迎えるエンドロールも、やり場のない悲しみを抱えながら、果てしない青空の下に一面に光を浴びて風になびく向日葵の群生が脳裏に焼き付けられるものもありました。見終わって、よくわからないまま「なんだったんだ?」と「?」マークを頭に乘せたような感じで映画館を後にしたのに、何年も経ってから「ハッと」して、もう一度、レンタルで借りて心震えるものもありました。後になって大輪の花が咲く種が、心のどこかに蒔かれていたことに気づかされました。

青山学院でも、皆さんの中に蒔かれた、いろいろな種があるのだろうと思います。今は硬い殻に包まれていたとしても、きっとこれから思わぬ時に思わぬ仕方で、辿りゆく歩みの中で、彩りをはじき出させ、味わいを醸しださせることでしょう。成り行きでの出会いも、「?」マークの今も、すべては魂の糧とされることを確信しています。

巣立ちゆく皆さんに私が大事に思っている祈りを送ります。これはかつて留学していた頃に通っていた教会で、毎週礼拝の最後に牧師が祈ってくれた祈りでした。

Live simply

Love generously

Serve faithfully,

Speak truthfully

Pray daily

Leave everything else to God

Amen

つつましく生きなさい

惜しみなく愛しなさい

心から仕えなさい

誠をもって語りなさい

祈りを絶やすことなく

あとはすべて神にお委ねしなさい

アーメン

最後のLeave everything else to God「あとはすべて神に委ねて」というところが励ましでした。目に見える成果に心躍らせる日ばかりではないですし、喜びよりも心に重くのしかかる破れに沈んで眠れないまま、時間だけ過ぎて迎える朝もありました。それでも刻む1日1日の「?」も、いつか伏線回収されるようにして神様の時の中に位置付けられ、意味付けられて分かる時が来ることを信じて歩いてゆけた言葉でした。もう一つ私がかげられる讃美歌があります。

「かみともにいまして、ゆくみちを守り、天のみ糧もて、力を与えませ。

また会う日まで、神の守り、汝が身を離れざれ。荒れ野をゆく時も、

あらし吹くときも、ゆくてを示して、たえず導きませ。御門に入る日まで、

いつくしみひろき、み翼のかげに、絶えずはぐくみませ。

また会う日まで、神の守り、汝が身を離れざれ」(讃美歌405番)

卒業おめでとうございます!

# 卒業する、いま

感謝と祈りが交わる、この季節。  
旅立つ人と見送る人の「卒業する、いま」の想いを聞きました。

幼稚園教諭 橋本 治奈 / 赤坂 洋子

## 平和をつくりだす 人として

幼稚園の3年間、皆さんは毎日お祈りをして、讃美歌を歌ってきました。

「沢山遊べてありがとうございます」「お休みの友だちが元気になりますように」「地震の所にいる方をお守りください」「フィリピンの子どもたち※1が楽しく過ごせますように」「戦争が早く

終わりますように」など、自分のこと、友だちのこと、遠くの場所で起きていることやそこに住んでいる方たちのことを覚えて神さまにお話しました。

年長組では韓国やモロッコからお客様をお迎えしたり、様々な国から来ている大学生の方たちと遊んだりして、国や言葉が違ってもすぐに仲良くなれることを知りました。そしてクリスマス礼拝では、40人で心を合わせて、次のような賛美をしました。

苦しみ悩みの中で 生きている人が 神さまの愛を求め 私を待ってる  
だから心から愛し合い 地球に平和 つくりだそうよ  
イエスさまを伝えよう イエスさまを伝えよう  
この小さな私たちにも 何かできるはず※2

神さまに愛されて、幼稚園でいっぱい遊んだ皆さんが、これからも平和をつくりだす一人ひとりとして大きくなっていかれることをお祈りしています。

※1 幼稚園の子どもたちが献金先として覚え、祈っている、認定NPO法人チャイルド・ファンド・ジャパンを通して支援している子どもたちや、現地NGO法人ミンダナオ子ども図書館の子どもたちのこと

※2 新生讃美歌390番(作詞・作曲:福永保昭, 1989)

保護者会副会長 渋井 一華

## 卒園・進学に よせて

息子の卒園が近づき、幼稚園でのかけがえない日々が思い出されます。

年少では、先生方に見守られながら好きな遊びを見つけ、幼稚園が安心して過ごせる場所になりました。

年中では、時には意見をぶつけ合いながらもお友だちと関わるのが楽しくなりました。

そして年長では、同学年の40人が互いを思いやり支え合う中で、「友だち」から「仲間」へと絆を深めていきました。

一人ひとりが神様から与えられた、かけがえない存在である——キリスト教の教えにもあるように、先生方は子ども達の個性と人格を尊重してくださいました。おかげで子ども達同士も、相手との違いを認め、信じ合い、協力し合うようになり、その姿に大人の私も何度も心を動かされました。この3年間の大きな成長は、日々祈りをもって寄り添ってくださった先生方のおかげと心より感謝しております。

そして今、子ども達は初等部への進学を前に、新たな「仲間」との出会いに胸を膨らませています。幼稚園で培われたことが、次のステージでも子ども達の心を支えてくれますように。



初等部教諭 小林 寛

## 「沖へ漕ぎ出そう」

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。  
どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて神があなたがたに望んでおられることです。(1テサロニケ5:16~18)

卒業という節目を迎えて希望と不安がごちゃ混ぜになっているかな。未知の世界に飛び込むとなると普通は不安が大きくて身構えおびえるものですが、多くの仲間と中等部という同じ学校に進む皆さんの中には、電車を乗り換える程度のものだよと、軽く感じている人がいるかも知れません。もし、そうだとしたら残念です。

住み慣れた初等部に別れを告げて、これから出会う新しい仲間、新しい指導者に会えるこの卒業という節目を、自分を大きく成長させるきっかけとしてほしいと強く願います。

それには、この変化という海に一人乗りボートで漕ぎ出す決意を持つことです。行き先を自分で決め、ボートのオールを一人で漕ぐ。平戸での遠泳を思い出してほしい。泳いでいる仲間の姿は見えるけど、泳ぐのは自分の力だったはずです。潮の流れを体で感じ、波に翻弄されてもゴール目指して諦めずに泳いだあの感覚こそ、みんなを次のレベルに引き上げる原動力になるでしょう。

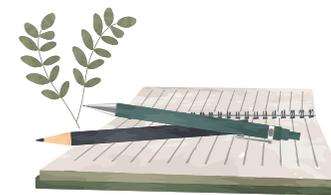
挑戦する機会をもらったことを喜ぼう。小さな不安が芽生えたらすぐに祈ろう。自分をいつも見守ってくださる神様に感謝しよう。この3つを神様はあなたに願っています。

新しい世界で揉まれて逞しく成長した君たちに、いつか再会することを楽しみにしています。



初等部6年 藤原 花実

## 日常に感謝して



私が初等部に入学したのは2020年、ちょうどコロナ感染症の流行が始まったときです。

入学式は夏服を着用して6月になってからでした。その後も16人ずつの分散登校、32人揃って授業が始まったのは2学期からでした。制限された学校生活が続く、日常が戻り始めたのは4年生の頃でした。米山記念礼拝堂に全校生徒が集まり、初めて全員で讃美歌を歌った時の響きは今でも忘れません。この感動から、宗教プロジェクトに入りました。給食も1人ずつ前を向いて食べる黙食から、机を向かい合わせて友人と一緒に楽しい会話をしながら食べられるようになりました。

朝「いってきます」と家を出て学校生活を送り、「ただいま」と自宅に帰る日々の日常がどんなに有難いことなのかと実感しました。

神様はこのような形で不便な生活が続く中から、私に気づきを与えてくれました。毎日の礼拝を通して神様に心を向け、いつも見守ってくださることに感謝をしたいです。苦しいときや困難な状況でも、神様を信じて、その時できる最善の努力をして進んでいきたいです。



中等部教諭 横山 道行

## 「神ともにあいまして」



77期生の皆さん、中等部ご卒業おめでとうございます。皆さんの門出を心から嬉しく思います。

入学式での挨拶やウェスレーホールニュースを通して、私は77期の皆さんに「7」が持つメッセージと



共に、中等部での生活と学びを通して「なりたい自分」を見つけ、目標に向かってさまざまなことに挑戦してほしいとお話してきました。時に悩み、迷いながら歩んだ中等部での3年間はいかがだったでしょうか。日々の思い出と共に、その時々での心の変化や自分の新たな一面との出会いがあったことも大切にしてほしいと思います。

私は、成長や変化に必要なものの一つに「出会い」があると考えています。77期の皆さんは、中等部での生活を通してどのような出会いを重ねたでしょうか。その中には、いつも私たちと共にいてくださる神さまとの出会いがあったことを、卒業後も心に留めておいてください。

4月からそれぞれの新たな一步を踏み出す皆さんに、神さまが共にいてくださり、行く道が守られることをお祈りしています。

中等部3年 小島 和夏

## 「仲間と進む」ということ

私はこの中等部で多くのことを学ばせてもらいました。その中で、一番印象に残っているのはハンドベル部での活動です。入部したとき1年生は1人で、日々緊張するばかりでした。でもそんな時、先輩方がいつも助けてくれました。私が1年生だった時の部長の先輩は、私の憧れでした。私には到底及ばない、輝きを放つ先輩でした。いつも慢心することなく、後輩たちのことも褒めて伸ばしてくれて、感激したのを覚えています。

3年生になり、私自身が部長という立場になって、それももう終わろうとしています。憧れの先輩のようにはなれていないと思いますし、右も左もわからず大変なことももちろんありました。でもいつだって後輩たちに、先輩たちに、助けられて乗り越えてきました。

一人より二人のほうが幸せだ。共に労苦すれば、その報いは良い。  
一人が倒れても、もう一人がその友を起こしてくれる。  
倒れても起こしてくれる友のない人は不幸だ。(コヘレト4:9~10)

この3年間、この聖句のように、ハンドベル部みんなの力で、様々な試練を乗り越えてきたと思います。この経験を糧に、高校生になってからも前に進み続けていきたいです。



高等部3年 井上 舜輝

## 「仕える主将」としての一年

私は一年間野球部の主将をしていました。楽しく幸せな時間でしたが、部員をまとめる立場として辛いことも多くありました。その中で、主将になってしばらく経った冬頃から意識しだした考えがサーバント・リーダーでした。体育会系の部活はどうしてもトップダウン型になりやすく上から押さえつけたほうがやりやすいことも多くありましたが、私はチームメイト皆に仕えることを信念として過ごすようになりました。例えば、朝に少し早く練習場所に行って皆

の分の道具を準備したり、同期や後輩に意見を求めながら練習を考えたりすることを意識しました。このことにより、周囲に気を配り、対話することで個々の考えを知ることが出来るようになりました。クリスチャンホームで育った私は、幼少期から教会で聖書に触れる機会があったため、サーバント・リーダーという言葉は知っていましたが、青山学院で過ごした学びの日々によってよりはっきりとリーダー像が形作られました。これからもこの経験を活かし、皆を支える人を目指します。



高等部教諭 山元 克之

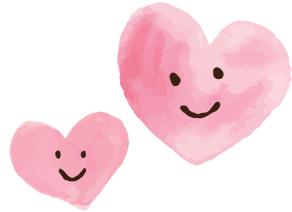
## 「意識の種」が芽吹くように

私は今年度、ラグビー部の顧問を務めました。「何を意識しているか」とコーチに問われ練習をする部員たちの姿を見ました。昨年度までの陸上部でも、微細な感覚を意識することで、走りの質が変わるのを目にしました。同じ動作、同じ練習メニューであっても、意識の有無が結果を分ける。そのことを、私は皆さんから教わりました。



私たちは、意識せずとも日々を過ごすことができます。しかし、どう生きるかを意識した瞬間、人生は鮮やかな彩を放ち始めます。野球部主将の井上さんが、「サーバント・リーダー」を意識したことで周囲との絆を深めたように、在り方を意識することで同じ生き方でも輝きが違って来るのだと思います。

この学び舎には意識の種が溢れていました。「サーバント・リーダー」や、「地の塩、世の光」をはじめとする聖書のみ言葉。それは一人ひとりの人生を内側から照らす意識の種です。卒業していく皆さんの心に蒔かれたその種が、新しい地で豊かに芽吹き、それぞれにしか成し得ない輝きを放つことを心から祈っています。

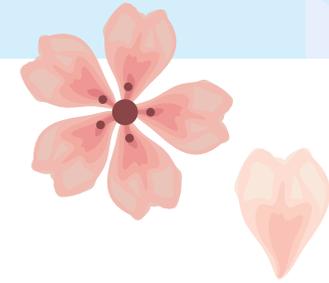


総合文化政策学部教授 茂 牧人



## 「人材につきない人間性を」

皆さん、ご卒業おめでとうございます。さて創世記の人間の創造の物語を振り返ると、そこにはとても大事なメッセージが込められていることがわかります。創世記の人間の創造物語は2つあります。1つ目は、神様が、人間を「自分のかたちに創造された」(創世記1:27)ことです。それは人間を「神の似姿」として捉える捉え方へと発展し、そこから「人間の尊厳」が導かれました。さらにもう1つは、神様が、人間を土の塵で形づくった後、「その鼻に命の息を吹き込まれた」(創世記2:7)のでした。そこから人間は、神様に対して応答できる、つまり、拒絶もでき、従うこともできる自由の存在者となりました。今大学は、人材教育が求められています。しかし、人材というのは、このような神様から創造された自由と尊厳をもった人間の人間性のある一側面ではありません。青山学院の教育は、キリスト教信仰に基づき、もっと奥行きのある尊厳と自由をもった人格全体を捉えることを追求してきました。皆さんが、今後このように尊厳と自由を大切に、神様と共に歩いていける人生であることをお祈りしております。



総合文化政策学部4年 松島 優希

## 「blessed」

キャンパスで過ごした4年間と異国の地で暮らした1年間、5年の月日は長いようであったという間でした。

SNSによって、自分や他人や物事の一面だけにフォーカスされがちなこの時代に、自分の全てを知ってもなお愛してくださる神様とキャンパスの中でたくさん時間を過ごせたこと、その喜びを知る友達と色々な時間を共有できたことが大学生活の中で1番の恵みです。正直たくさん失敗しましたし、勇気を振り絞れない場面も多々ありました。今もなお未完成ですが、大学生活に後悔はありません。一つ一つの出会いが、景色が、心の動きが今の私をつくっていて、入学した時は持っていなかったものを今はたくさん持っています。

在校生の皆さん、ぜひ行動してください。心が躍る方を選んでください。私たち人間はミスすることもある。でも神様は絶対にミスをしません。だから大丈夫です。神様を信じて進んでみてください。そしてあなたにとって世界はどうだったか、神様の愛はどうだったか、ぜひ教えてください。

God bless you!



# 表紙で綴る Wesley Hall News 150号のあゆみ

初代 Wesley Hall News 誕生!



チャールズ・オスカー・ミラー  
記念礼拝堂の  
絵が描かれています

旧『Wesley Hall News』創刊号  
(1964年4月)



旧24号 (1971年12月)

Wesley Hall News 復刊!



建学の精神を象徴する  
建物として建設された  
ウェスレー・ホール

復刊第1号 (1984年10月)



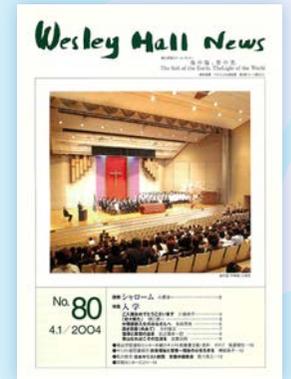
表紙がカラーになりました!

第22号 (1989年12月)



記念すべき50号!

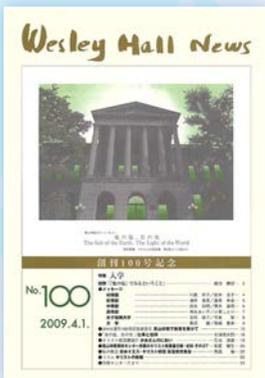
第50号 (1996年11月)



表紙は中等部入学式

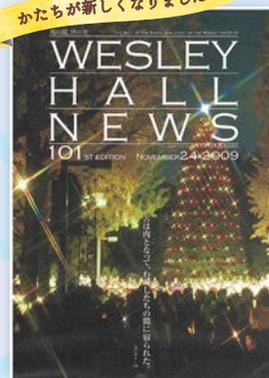
第80号 (2004年4月)

かたちが新しくなりました!



創刊100号を飾ったのは間島記念館

第100号 (2009年4月)



A4サイズ冊子から  
折り形式のパンフレットへ!

第101号 (2009年11月)



表紙は中等部礼拝堂献堂式

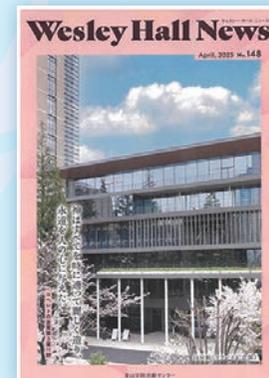
第130号 (2019年4月)

かたちが新しくなりました!



折り形式のパンフレットから  
A5サイズ冊子へ!

第140号 (2022年12月)



ようこそ、マクレイ記念館!

第148号 (2025年4月)



第150号 (2026年3月)

2022年度をもって、ウェスレー・ホールが  
取り壊されることになりました。

# 創刊 150号 記念特集

ページをめくるたびに重ねられてきた時間。

創刊150号を迎えたWesley Hall Newsに寄せて、思い出を綴っていただきました。

今回の寄稿では、今年度退任される玉木先生が青山学院で過ごされた年月を、信仰の歩みとともに語っていただきました。ウェスレーホールニュースの歴史の一端を担ってこられた先生の言葉を、どうぞお読みください。

## 34年間の宗教委員 を振り返って

経営学部教授 玉木 欽也



私の青山学院大学との出会いは、日本の大学助手時代を終えた後に、アメリカインディアナ州立大の客員研究員として勤務していた時に、本学経営学部の「生産管理」科目の教員公募にアプライして、神様の導きにより就任させていただいた時から始まります。

全学の宗教委員会の一員として各種の委員会活動に参加できたことは、一つのキリスト教団・教会に所属する信徒として過ごす信仰生活以上に、クリスチャンとして豊かに成長することができました。例えば、研修委員会の時には、国内外の超教派の動向やオープンマインドなキリスト教信仰の在り方を体感できました。さらに、ACF顧問の就任や、サマーカレッジやリーダーシップカレッジへの合宿参加を通じて、若きクリスチャン学生たちの信念や言動の深さを実感することができ、私も励まされることが多々ありました。大学奨励やウェスレーホールニュースで一番心に残ることは、『九死に一生を得る導き』のメッセージです。

最後に神様の導きのもとで皆様と共に働けたことに心から感謝いたします。アーメン。

# 思い出の WHN



## 思い出が集まる場所

総合文化政策学部 1年 中山 梨華



このウェスレーホールニュース150号の節目に一体何を書こうか、と私は手元のバックナンバーを読み返しました。自宅には中等部から青山学院に入学して以降のウェスレーホールニュースが保管してあります。それらは当時の友人や先生が載っていたり、クリスマスなどの行事の記憶と一緒に思い出のひとつになっているので大切です。特に友人が書いたものを見つけると、普段見られない心のうちを知ることができたように感じとても暖かい気持ちになります。高等部の頃には、定期試験直前に発行されたウェスレーホールニュースの中で聖書の先生が取り上げていた聖書箇所が出題され、読んだところだ！と解きながら少し嬉しくなったのを覚えています。このウェスレーホールニュースに寄稿している幼稚園生から大学院生、先生方まで学院中の幅広い方々のエピソードからはそれぞれの人生を垣間見られます。色々な人達から寄せられた思いの詰まっている温かいニュースが手のひらに乗る程の冊子で読む事ができるのは素敵な事です。また今回の様に思い出を振り返るきっかけをいただけたことを嬉しく思っています。これからもずっと続き、また誰かの心を温めてくれますように願っております。

# 創刊 150号を記念して

学院宗教部長 伊藤 悟

『ウェスレーホール・ニュース』が150号を迎えたことをまことに感慨深く思います。13～14ページに紹介されている各号の表紙を見るだけでも、時代の流れや、その時々<sup>の</sup>青山学院の姿をうかがい知ることができます。

本誌は、1968年に学院創立90周年記念事業として建設されたキリスト教活動の拠点「ウェスレーホール」がまだ建築計画段階であった1964年に創刊されました。当初は宗教主任会が編集・発行を担い、年4回刊行されていました。しかし1969年以降の大学紛争の影響を受けて、1971年の24号をもって廃刊となりました。この時期の誌面には、青山学院の教育のあり方を問う直す論説や座談会記事が多く掲載されています。

その後、1980年代に入り学院全体が落ち着きを取り戻す中で、1984年に『ウェスレーホール・ニュース』は復刊されます。現在の150号は、この復刊から数えての通算号数です。1989年には表紙にカラー写真が用いられるようになり、80号以降は各設置学校のキリスト教活動を伝える写真が多く採用されています。101号からは装丁が大きく刷新され、140号以降は現在のA5判中綴じの形になっています。

建物としてのウェスレーホール(1968～2023年)の姿はもうありませんが、本誌(24号+150号)は、創立152年目を迎える青山学院のキリスト教教育と学院宗教センターの歩みを今に伝える貴重な資料と言えましょう。これからも本誌が、サーバント・リーダーの育成を目指す青山学院の跡と声を確かに記録し続け、ますます学院に連なる一人ひとりの記憶と実践を結び、信仰と教育をつなぐ媒体としての役割を果たし続けることを期待します。

## 編集後記

ウェスレーホールニュースが150号を迎え、編集委員の諸先輩方、宗教センターのみなさま、寄稿された多くの方々、そして読者のみなさまに深く感謝いたします。

ウェスレーホールニュースこそ、一粒の種だと私は考えます。私も大学在学当時、また中等部奉職以来、ずっと手にしてきました。はじめてから終わりまで、読み味変わったこともありましたが、正直言って、慌ただしく目を通すだけや、なかなか読めないこともありました。一方で、心に残る文章や聖句もあります。みなさまにもそのような方々が少なからずいるのではないのでしょうか。その、心に残ったものが種であり、気づかないうちに大きく成長し、心の根幹となるのだと思います。

卒業を迎えたみなさま、おめでとうございます。特に、青山学院を巣立っていくみなさまの心に種がしっかりと植えられていますように。

中等部教諭 林 謙二

## Wesley Hall News 第150号

2026年 3月2日発行

発行 青山学院宗教センター  
学院宗教部長 伊藤 悟  
編集 青山学院 Wesley Hall News 編集委員会  
〒150-8366  
東京都渋谷区渋谷4-4-25  
TEL 03-3409-6537 FAX 03-3409-8865  
デザイン 株式会社パットンファイヴ  
印刷 株式会社スバルグラフィック  
URL <https://www.aoyamagakuin.jp/rcenter/index.html>  
MAIL [agcac@aoyamagakuin.jp](mailto:agcac@aoyamagakuin.jp) みなさんの感想をお聞かせください